

津南「ごっつお」ミュージアム

～シェアしてつなぐ、雪のおかげ～

大東文化大学環境創造学部 齋藤博ゼミ

代表者：山本浩輝 発表者：山本浩輝、白崎貴子

参加者：荒井佳奈、安藤大悟、金子拓磨、四村岳、白鳥華紀、関矢七望、野口美桜、
長谷川智紀、武蔵有花、目黒莉奈、渡部勝暁、

1章 はじめに

縄文の時代から人が住み、雪とともに生活を営むことで文化を育んできた津南町は、元来人と自然が共存する豊かな地域である。本政策提案では、この豊かな地域資源の可能性を最大限に発揮することで、衰退しつつある地域に元気を取り戻すことを目的としている。

地域の方々が口にする「ごっつお」（＝ごちそう）という言葉は、自然が育んだ豊かな恵みを表し、地域への愛着と誇りが溢れる豊かな響きを持っている。この地域全体に広がる「ごっつお」（⇒地域資源としてのヒト・コト・モノ）を軸として、地域住民が主体となる活動を展開することによって、都市農村交流の促進と地域コミュニティの活性化を両立させることが本政策提案の骨子となっている。そして、その具体的な方法としての「津南ごっつおミュージアム」を軸とした政策提案を行う。

「津南ごっつおミュージアム」により再編集される地域資源

津南町の多様な地域資源をシェアすることで、地域内外の様々なヒト・コト・モノの関係を再構築することが「津南ごっつおミュージアム」の目的である。「津南ごっつおミュージアム」は、津南町全域に広がる地域資源を再確認・再発見し、地域内外の様々な人々が様々な形シェアするための「拠点づくり」と「プログラムの提供」を行う。その結果、地域内外の交流人口を促進させるだけでなく、少子高齢化により活気が失われつつある地域内のコミュニティの活性化を図ることを目指している。

「シェアリング津南」による地域協働の運営体制

「津南ごっつおミュージアム」は、物的な地域資源の保存や展示だけでなく、津南町の人々や組織、あるいは、その活動といった社会的な資源の育成も担っている。その実現のためには、様々な地域内外の主体が連携し独自のノウハウを持ち寄り（＝シェアする）ことが出来る運営組織が必要となる。そこで、「津南ごっつおミュージアム」の運営を担う「シェアリング津南」は、DMOとしての観光地域づくりの推進だけでなく、地域を支える様々な主体の連携を促進しながら、地域の可能性を広げることを目指している。

2章 研究の方法

まず最初に、文献調査による津南町の基礎知識を調査し、プレ現地調査(H28. 5.21-22)において、資料収集や簡単なヒアリングを通して津南町の全体像の把握や新たな魅力・課題の発見を行った。これらの事前学習を踏まえて、実現可能な提案を行うため現地調査(H28. 8. 3-6)を行った。ヒアリング対象として、町役場(総務課企画財政班、地域振興商工観光班)をはじめとする、地域での積極的な取り組みを行っている主体である「かたくりの宿」「見玉集落」、「NPO 法人越後妻有里山協働機構」、「ごっつお市」、「NPO 法人 Tap」、「農家民宿サンベリー」、「農と縄文の体験実習館なじょもん」、「(有)フジミヤ」に対して行った。

文献調査及びヒアリングを通して、津南の課題解決と魅力の向上を図る提案として「エコミュージアム」をコンセプトの中心とした。そして、津南町で提案する「エコミュージアム」で展開される具体的なプログラムを考えるうえで、齋藤ゼミが東京都練馬区で実践している「楽農くらぶ(福祉農園づくり)」における経験を参考にするとともに、更なる可能性を追求するために、「道の駅・保田小学校」「取手アートプロジェクト」「財キープ協会」を研究対象事例として調査を行った。また、日本版DMOである「リアス観光創造プロットフォーム」について、運営組織の事例研究として文献調査を行った。

3章 津南町の現状把握

3-1 課題

津南町の生産年齢人口は昭和30年から12,332人、昭和60年で8,487人、平成22年で5,624人と年々減少している。現在(平成28年)の人口は10,133人であり、それと合わせて高齢化率38.2%と高齢化も進んでいる。高齢化が進むことで、津南町の基幹産業である農業の担い手不足を引き起こし、農家数は昭和60年で2,296軒、平成22年で1,710軒と減少しており、農業の衰退も進行している。減少したのは「ヒト」だけではなく、津南町の学校数(小学校・分校)も昭和30年では21校であったが、現在では3校となり、町民にとっての思い出が失われている。

3-2 魅力

津南町には魚沼産コシヒカリや雪下人参に代表される農作物や信濃川が作り出した河岸段丘などの自然環境、縄文時代から長く続く歴史と文化など、多くの魅力である「ごっつお」がある。また、見玉集落では採れたての野菜をごちそうしてもらい、伊勢屋旅館では温かみのあるサービスなど、おもてなしの心を感じることが出来た。つまり、実際に訪れることで発見する魅力が多くある地域なのである。

3-3 津南町にとっての「雪」

地域住民の雪に対する思いは否定的なもの肯定的なもの両方が混在している。まず、雪をやっかいものと捉えている考え方である。「冬の時期は朝早くから除雪活動をしなければならない」「雪のせいで町が他地域と隔離されてしまう」という意見があり、「雪さえなければ!」という思いが読み取れた。その一方で、雪のおかげで津南町は魅力に溢れているという考え方も多くうかがえた。「雪のおかげで美味しい

農作物と豊富な水があり、それを食べているから健康になれる」「雪のおかげで雪まつりなどの雪国独自のイベントが出来る」など、「雪のおかげ」で雪国ならではの魅力を実感していることが分かった。

3-4 地域の取り組みと課題（行政の取り組み）

津南町が取り組んでいる地域政策として「大地の芸術祭」「雪国観光圏」「苗場山麓ジオパーク」がある。

・「大地の芸術祭」：野外で現代アートをテーマとしたイベントで、知名度の向上や観光客の増加など大きな効果が出ている。その一方で、芸術祭期間外での集客が課題がある。

・「雪国観光圏」：豪雪地帯である地域独特の資源をPRすることを目的としている。サイン計画を共同で整備することや、共通の認定評価を導入するなど、一定の連携成果がみられる。その一方で、体験プログラムなどはそれぞれで完結してしまっており、連携が少ないという課題がある。

・「苗場山麓ジオパーク」：地球の成り立ちを観察できる地形や地質、そこで育まれた人々の営みという津南町の魅力を体験学習することが出来る場所である。しかし、活動実績がまだ浅いため、ジオパーク全体で楽しめるプログラムが確立していないという課題がある。

3-5 地域の取り組み（市民の取り組み）

・ごっつお市：津南町の郷土料理を味わえる食堂で、食材は地元で採れたばかりの新鮮な野菜が中心である。来訪者からは「食べたら体の調子が良い」「母の味がして懐かしい」といった声が聞かれ、反響は上々である。しかし、「レシピが分からないし、作る環境がないので作れない」といった声もあり、津南町の食文化を体験し、理解できる場所が少ないという課題がある。

・観光物産館：観光拠点であり、津南の特産品をお客様が飽きないような商品開発を行っている。しかし、観光施設としてお客様に訪れてもらうための工夫や情報発信の少なさが課題である。

・NPO 法人 Tap：津南の「つながり」を取り戻すことを目的として設立され、健康を意識したイベントを多数行っている。イベント数は多いが、イベント参加層にバラつきがあるため、住民全体を巻き込むプログラム作りが課題である。

4章 事例研究

「津南ごっつおミュージアム」で展開されるプログラムの提案における事例研究として、齋藤ゼミが実践している「楽農くらぶ（福祉農園づくり）」での実践を参考としている。さらに、地域の拠点づくりの事例研究として「道の駅 保田小学校」、山間地域における自然体験プログラムの事例研究として「財キープ協会」、そして、空き家活用の事例研究として「取手アートプロジェクト」の調査を行っている。

4-1 東京都練馬区「楽農くらぶ」の「福祉農園づくり」

○調査目的：津南町では人と人の「つながり」を大事にしている NPO 法人や集落が存在するが、集落などが点在していることから集落同士のつながりは希薄であるため、私達が携わっている楽農くらぶの取り組みを活かし、さらなる「つながり」を広げていくことが目的である。

○概要：楽農くらぶでは、NPO 法人自然工房めばえが中心として活動を行っている。植物をツールとして「人と自然」がふれあい、「人と地域」が集い、「人と人」の心が手をつなぎ、障害や世代などを越えてコミュニケーションや生きがいを創出するぬくもりのある空間や居場所、時間の創出を目的としている。

○調査結果：楽農くらぶでは NPO 法人自然工房めばえを筆頭に農家、大学、障害者団体、地域住民などが自分達で出来ることを活かして活動を行っている。立場も境遇も異なる人たちが協力し合うことで、人と人とがつながり、新たなコミュニティが形成されることが調査結果として得られた。

○政策提案のポイント

- ・植物をツールとしたコミュニティの活性化
- ・地域自然を活かした「家づくり」と「畑づくり」の活動

4-2 千葉県鋸南町「道の駅 保田小学校」の「廃校を活用した拠点づくり」

○調査目的：津南町には豊かな自然や豊富な食材、資源があり県外からも多くの人々が訪れるが、地域の歴史・文化・食について学ぶことが出来る場や、交流の場が少ないため、地域資源を集約させた交流拠点づくりを調査することが目的である。

○概要：2014年、学校としての役目を終えた保田小学校が「道の駅 保田小学校」として、鋸南町の人・モノ・歴史・文化を集約させた、地域活性化の交流拠点として活用されている。

○調査結果：「保田小学校」では、体育館を使った直売所、教室を使った宿泊施設など小学校の雰囲気を残しつつ、温浴施設や公共施設、食堂を含めた都市交流施設として展開した。施設自体に小学校のイメージを極力残すことで、学校の備品はエコの一環として捨てずに残せるうえ、小学校の面影も残せるという利点が生まれる。その利点により、町の人々にとっての思い出の場所を有効活用しながら維持することができると調査結果から得られた。

○津南町への政策提案ポイント

- ・廃校を地域の交流拠点としてリノベーション ・宿泊機能など拠点としての機能
- ・小学校の面影を残すことの利点

4-3 山梨県「キープ協会」の「自然体験プログラム」

○調査目的：津南町は豊かな自然に恵まれているがその自然を活かした活動がごくわずかであり、参加している年齢層も狭いという現状である。そのため、自然環境を最大限に活かした自然体験プログラムを調査することが目的である。

○概要：キープ協会は、「人類への奉仕」の4つの理念、「食糧」、「保健」、「信仰」、「青年への希望」に「環境教育」、「国際協力」を加えた6つのテーマを事業方針とし、体験プロ

グラム、宿泊、研修などを多角的に行っている。

○**調査結果**：現代の自然体験学習はインターネットなどを通じて感覚的に学ぶ「間接体験」、シミュレーションや模型型など模擬的に学ぶ「模擬体験」が主流になっているが、今後の自然体験学習では実際に自然に触れ、感じる「直接体験」が必要となってくる。キープ協会では森の中を散策しながら学ぶことで、直接的に自然を感じ取れる体験学習になっている。それだけではなく、キープ協会の「宿泊施設」には、清泉寮とキャンプ場、キープ自然学校の3つが存在している。それぞれ、家族旅行、グループ旅行、研修目的の滞在といった用途に合わせた施設となっているため、用途に合わせて自分が楽しめる自然体験プログラムを選択できることが調査結果として得られた。

○津南町への政策提案のポイント

- ・自然体験学習は実際に自然と触れ合う「直接体験」
- ・用途や年代に合わせてプログラムを選択できる多様性

4-4 千葉県取手市「TAP（取手アートプロジェクト）」の「市民主体性のプログラム」

【調査目的】津南町を含む越後妻有には、世界最大級の国際芸術祭である「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」が潜在資源として存在しているので、地域資源を生かしたアートによる地域づくりを調査することが目的である。

○**概要**：1990年より市民と取手市、東京芸術大学の三者が共同で行っているアートプロジェクトである。若いアーティストたちの創作発表活動を支援し、市民に広く芸術と触れ合う機会を提供することで、取手が文化都市として発展することを目指している。

○**調査結果**：取手アートプロジェクトは市民が積極的にプロジェクトに取り組んでおり、自分たちの身の丈に合った活動を行うことで、市民主体の持続性を持つ活動である。その中で特に興味深いプログラムとして減量住宅が挙げられる。空家が抱える余計な脂肪は、耐震問題や老朽化、固定資産税や維持管理など様々な問題を生み出すため、痩せて余計な負担を減らすプログラムである。作家が空家に約1年半住み、その間の家賃をオーナーは無料にするという仕組みを施し、その代わりにアーティストが家に住みながら「理想体型」にシェイプアップするための減量作業を行う。「壊す」ことを前提としてプロジェクトを進めるという従来のプロジェクトにはない新しい発想が調査結果として得られた。

○津南町への政策提案のポイント

- ・市民主体によるプロジェクトの持続可能性
- ・減量住宅による空き家対策

4-5 地域連携を図る運営組織

宮城県気仙沼市「リアス観光創造プラットフォーム」の「DMO組織」

○**調査目的**：津南町には更なる活性化のために各組織の連携が重要であると考えた。それと同時に津南町に眠っている資源を観光資源として目覚めさせる方法も模索できる組織を調査することが目的である。

○**概要**：「リアス観光創造プラットフォーム」は、気仙沼市の行政、商工会議所、観光コンベンション協会との四位一体の協働体制を作り上げ、気仙沼市の観光業の戦略的方策を推進、実行していく中核組織である。

○調査結果：気仙沼市では「リアス観光創造プラットフォーム」の設立により四位一体の協働体制を作り上げたが、各組織の役割分担が出来ておらず、役割の重複や不足が新たな課題となった。しかし、DMO 組織として役割を加えることで、共通の目標を持ち、役割分担の明確化を図った。DMO 組織とは国内外の観光客を戦略的に創出することと、地方創生を実現するためにマーケティングとマネジメントを行い、目標と情報の共有をすることで地域一体を図る法人であることが調査結果として得られた。

○津南町への政策提案ポイント

- ・中核組織としての役割
- ・観光価値を高める戦略作りを行う DMO 組織

5章 政策提案：津南「ごっつお」ミュージアム

5-1 津南「ごっつお」ミュージアムの基本コンセプト

政策提案の中心となる「津南ごっつおミュージアム」の立案にあたって、ヨーロッパを中心に疲弊した地域の再生を目的とした取り組みである「エコミュージアム」を下敷きとしている。さらに、ミュージアムで提供される様々なプログラムについては、近年、様々な形で我々の生活を変えつつまる「シェア」の可能性に着目したものとなっている。

(1)「エコミュージアム」とは

「エコミュージアム」は日本語に訳すと、「生活の博物館」となる。その特徴として、特定の建物を持たず、地域全体を博物館として捉え、地域にある資源を展示物としている。エコミュージアムでは地域内の主体同士がつながることにより、各主体の活動が展開・発展するネットワークと、互いに学習する姿勢をつくるコミュニティが生まれるなど未来の地域を作り出す博物館である。エコミュージアムの重要な柱として、「Participation（手法的特徴）」「Heritage（形態的特徴）」「Museum（基本条件）」がある。この柱で我々は博物館機能を拡充させて、展示や体験するだけではなく、地域のことを地域内外の人で考えることが出来る機能に置き換え、津南町のエコミュージアム化を図る。

(2)「シェア」

豊かな自然や美味しい農作物である「モノ」、雪国独自の知恵である「コト」、地元で熱い思いを持つ「ヒト」が存在する。「モノ・コト・ヒト」をどのように繋げることができるか、どのように提案で生かすことが出来るかを考えた際にキーワードとなるのが「シェア」である。参加者が参加費を払い、運営が楽しめるプログラムを提供をすることで、活動の場が活性化するだけではなく新しいコミュニティが生まれる効果がある。このように、互いに出し合い、共有することで相乗効果が得られるのが「シェア」である。

5-2 津南「ごっつお」ミュージアムで展開されるプログラム

我々が行っている「楽農くらぶ」を中心として、事例研究を参考として「津南らしさ」を取り入れたプログラムを提案する。各プログラムは津南町の課題解決に資する「交流人口の増加」「健康の促進」「農の活用」をテーマとしている。

(1) 「シェア・スクールーみんなの拠点づくり」：リノベーションによる廃校の活用

地域コミュニティの中心として長く親しまれてきた小学校の廃校を利用し、その周辺にある施設との連携、及び、地域資源を活用することによって、地域の特徴を生かした拠点づくりを行う。

	現在の利用状況	拠点の役割	拠点の機能
外丸小学校	未使用	「ごっつおミュージアム」の情報発信拠点	展示機能、事務機能、窓口機能、学習機能
中津小学校	地域おこし協力隊事務所（予定） ジオパークの拠点施設（予定）	「ごっつおミュージアム」の中心拠点 周辺施設との連携による地域拠点	「食」の拠点 体験学習機能、学習機能、
津南原小学校	文化財班の物置（遺跡・子民具等）		「農」の拠点 体験学習機能
上郷中学校	大地の芸術祭のパフォーミングアーツの拠点、上郷グループ座	長野県栄村との連携事業窓口	展示機能、宿泊機能、舞台・練習機能、窓口機能、情報発信機能
三箇小学校	地域おこし協力隊事務所、都会との交流事業の拠点	大地の芸術祭の際のゲートウェイ	宿泊機能、展示機能、窓口機能、情報発信機能
結東分校	かたくりの宿（宿泊施設）	秋山郷の地域拠点	窓口機能、宿泊機能、情報発信機能

(2) 「飯っせんじゃーご飯がつなぐ縁づくり」：郷土料理による健康づくり

【概要】 季節に応じた特産物を使い、幅広い年代が楽しめる郷土料理の料理教室を行う。

⇒食材、風景、人材、レシピを「シェア」する。

【ポイント】 津南町の郷土料理は美味しく健康志向であるが、現在では郷土料理の伝承が薄れている問題があるため、郷土料理を実際に作る機会が重要である。

【効果】 地域食文化の継承、健康寿命の延伸、安心コミュニティづくり

(3) 「つな農プロジェクトー田んぼはみんなの晴れ舞台」：福祉農園づくり

【概要】 我々が実際に行っている「楽農くらぶ」を参考に農のプログラムと季節を通した自然のプログラムを行う。

⇒農地、人材（コミュニティー）、農と自然の知恵を「シェア」する。

【ポイント】 ヒアリングを行った際に地域間のつながりの希薄化を強く感じたため、人々が協力し合う機会があることで、コミュニティの強化を図ることができる。

【効果】 農業資源の活用、体験学習による魅力発信、コミュニティの活性化

(4) 「ダイエット・ハウスーリバウンド大歓迎!」：減量住宅

【概要】 若手の作家や地域外の人に手軽に空き家を提供する条件として、春から空き家を減量し、冬に雪の重みで自然に壊してもらおうプログラムである。

⇒空き家、地域外の人、アイデアを「シェア」する。

【ポイント】 空き家提供者は家を提供する代わりに無料で家を壊してもらうことができ、空き家利用者は家を減量するという条件の代わりに無料で家を手に入れることができる。減量だけではなく、モノづくりのワークショップを行うことでリバウンドさせる空き家もある。短期間の空き家利用であるが利用者が津南町に簡単に移住体験ができると

いうメリットがある。

【効果】 空き家問題の解決、人材育成、大地の芸術祭の拡張

(5) クリエイティブ・ハイキング

ハイキングによってプログラム全体をつなげることが実現し、地域全体の魅力を体験することが出来る。また、津南町の課題である交通の不便さを「歩く魅力」へと転換する取り組みでもある。ハイキングのコース設定は、四季の変化や水の豊かさ、「雪のおかげ」などの「自然を体験すること」と「地域内外の人の交流促進」を柱とし、地域の様々な人々の協力を得ながら運営する。

○コース例：津南町には多様な形で「雪」が関係しており、さらに、冬の豪雪によりたくさん雪解け水が信濃川に流れ込み、津南町の生活の基盤である「水」を得ることが出来る。この流れをプログラムとして取り入れることで「雪のおかげ」である水の豊かさを感じることが出来る。

5-3 「シェアリング津南」(運営組織)

「シェアリング津南」は、「津南ごっつおミュージアム」の運営を中心に、津南町の人と組織同士をつなげるDMO組織として役割を持っている。さらに、「津南ごっつおミュージアム」をはじめとする地域での取り組みの持続的なものとするために、地域の担い手となる地域公共人材を育成する役割を有している。

(1) 運営組織としての役割

：「津南ごっつおミュージアム」の運営組織として、拠点の管理、町民が参加しやすい環境づくりを行う。

(2) 中核組織としての役割

：行政組織、民間組織、市民組織、地域住民をつなげることと、役割分担を行うことで更なるまちづくりの活動を行うことが出来る。そして、共通の目標づくりや情報の共有を行うことで津南町全体にまとまりを作る。

(3) 観光業としての役割

：地域資源を観光価値として高めるために「マネジメント」「マーケティング」を行い、戦略的に観光客を呼び込む提案を行う。

(4) 市民主体のまちづくりの促進

：町民がまちづくりの活動に参加しやすい環境を作ることで、市民の意見の反映や地域活性化につなげる。

(5) 地域公共人材育成プログラム

【概要】 地域公共人材とは「ヒト、モノ、カネ、情報」など地域における様々な資源をコーディネートすることなどにより、活動を創出し活性化させ、持続可能なものとしていくマネジメント能力を持った人材のことである。地域公共人材プログラムでは地域外への情報発信の仕方や「マネジメント」「マーケティング」能力を見つける講座を設ける。

【ポイント】津南町には地域遺産を活用して津南町の良さを伝える活動をしている組織が多くあるが、中には自分たちの活動をどう発信すればよいか分からない組織もある。

【効果】

○地域外への情報発信の手段と観光業に必要なノウハウを取得

：効果的な情報発信を行うための HP のつくり方を取得するだけでなく、地域資源を観光資源としてマネジメントするノウハウを学ぶことで観光価値の高い商品の開発、活動の展開を行うことが出来る。

○学習する機会と環境の提供

：まちづくりのための専門的な知識を学ぶことが出来る機会と環境を提供することで、津南町の人には新たな可能性や生きがいを見つけることができ、自信につながる。

○人材育成のサイクルを生み出す

：多様なノウハウを身に付けた地域公共人材は「シェアリング津南」の一員として「津南ごっつおミュージアム」の運営を行い、実践を重ねることで次の地域公共人材の育成を行うというサイクルが生まれる。

6章 まとめ：津南「ごっつお」ミュージアムの可能性

「津南ごっつおミュージアム」は、津南町の地域資源を再確認、再発見、共有することによって高められた地域への愛着や誇りを基礎としている。さらに、その地域資源を発信、継承、発展させることで、交流人口の増進及び居住環境の向上を両立させる取り組みである。外発的な資源だけに頼るのではなく、外発的なものと内発的なものを、自分たちの身の丈に合った取り組みを通して紡いでいくことによって、津南町の「地域らしさ」の可能性を最大化することになるのではないかと考えている。

参考文献

- ・津南町総合振興計画（平成 28 年度～平成 32 年度）、津南町役場、平成 28 年
- ・津南の料理集作成委員会「昔なつかしい 津南のごっつお」滝沢印刷、平成 22 年
- ・大原一興「エコミュージアムの旅」鹿島出版社、1999 年
- ・HP タイトル「地域公共人材大学連携事業」(<http://www.ryukoku.ac.jp/uni cola/pp/PP20100707.pdf>)
- ・ディスカバージャパン編集部「地方創生の切り札 DMOとDMDのつくり方」エイ出版社 2016 年
- ・レイチェル・ボッツマン「シェア 共有からビジネスを生み出す新戦略」NHK 出版、2016 年